

## 国道321の怪～酒井明 説話集26※～

日もとっぴりと暮れて、人も車も行き交う数がめっきり減ってくる。

国道321号線も今でこそますますになったが、それまでの道は風の日はしぶきが飛び上がり、所によったら昼でもうす暗い程茂った所もあった。

その時分のこと、南から宿毛へ帰る車が1台。町の灯がちらほら見えるようになって、やれやれと思った運転手の目の前で、若い女が手を上げている。どうせ帰りの便のことだと車を止めてやった。

黙って乗り込んだ女に、どちらまでかと声をかけるが返事がない。鏡にうつる顔を見ても特別どうということもない。

そのうち何とか言うだろうと車を走らせたが、もうすぐ橋を渡って宿毛じゃ、という所で何気なしにのぞいた鏡の中には誰もおらん。あわてて車を止めて、座席のほうを見直したが確かにおらん。

その時、潮の匂いがぷうんとしてきた。よくよく見ると座席がぐっしょり濡れている。

ぞうとした運転手。無我夢中で会社まで帰っては来たものの、当分気分が悪かったという。

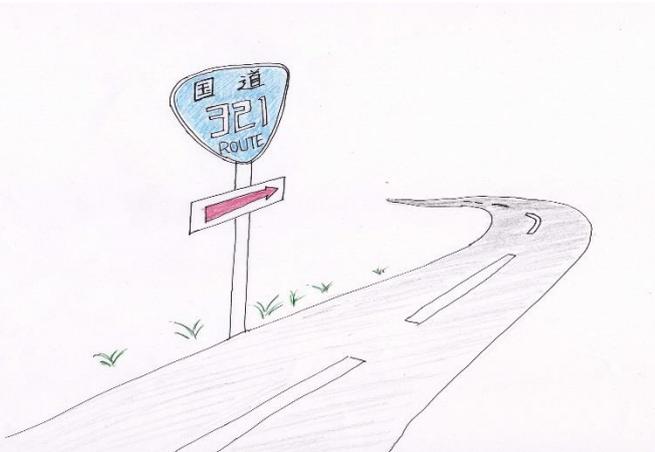
片島道路が沼の中を走っていた時分、夜になって商売から戻りよると、よう沼の中にこかされたという人もおるが、みんなかわうその仕業で、どうせ車に乗ったのもいたずらもんのかわうそが悪さをしたがぜよ。

話はそんな所で落ち着いたが、そのかわうそも鐘や太鼓で探しても見つからんという時代になった。

新田沼の近所で夜中にライトに照らされて伸び上がったかわうその姿。夜釣りの餌を失敬された魚釣り。磯の立あみにかかったかわうそ。

そんな話はあちこちでよう聞かれたもんじゃったが、それも昔のことになった。

松田川のとっと上流でも、大入道に化けてかごしの魚をとってしもうたという話もあるので、車の中の女の人もひよっとしたらかわうそじゃったかもしれん。



※) 平成26年3月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。